

『慈悲なき美女』に女性の声を聞く 男の身体と言葉が跪くとき

向井 毅

ジョン・キーツが自らの詩に『慈悲なき美女』の題名を得た、男女の求愛を主題にする中世の問答詩がここにある。中世の『慈悲なき美女』(La Belle Dame sans Mercy)は、長らくジョフリー・チョーサーの作品と考えられていたが、アラン・シャルティエ(Alain Chartier, c. 1392-c. 1430)の仏語詩をヘンリー6世に仕える騎士リチャード・ルース(Richard Roos, c. 1410-1481/2)が英語に翻訳したものである。原詩は1424年に創作され、英語に移されたのは1450年頃と推定されている。わずか四半世紀の時の移りゆきとドーバー海峡をまたぐ場の移動により、作品の評価は非難から賞賛へと転回する。つれない美女を描き、女性を誹謗し、貶めたかどでシャルティエは、宮廷風恋愛精神の復活を図るパリの宮廷から追放され、一方ロンドンでは宮廷風恋愛の愚かさを暴いた女性の言葉が評価を得る。現存する写本と刊本の流布がこの英詩の人気を裏づけ、書物のなかに併置される他の作品との主題上の関連性、いわゆるコンテクストが当代の作品受容のありようを示している。

本稿では、ルースの英語翻訳詩に描かれる、男女の言葉のやりとりを検討し、中世に伝統的な、求愛する男の言語的・身体的規範が女性のまewith溶解する様を目撃する。男の意に沿う女、それも精神世界の中心を取るように(男に)仕掛けられた女、を拒む女性の登場であり、女性をめぐる新しい心性が整い始める時代の胎動である。

1 詩の語りと構造

この詩の構造は少々複雑である。¹第1-4連のプロローグには、夢うつ

¹ ルースによる英訳詩の校訂本として、現在、Political, Religious, and Love Poems, ed. by Frederick J. Furnivall, EETS o.s. 15 (Oxford University Press, 1903²)、The Works of Geoffrey Chaucer, ed. by W.W. Skeat, vol. 7 (Oxford University Press, 1897)、Chaucerian Dream Visions and Complaints, ed. by Dana M. Symons (Kalamazoo, 2004)の3種が利用可能である。本稿におけるテクスト引用には

つのなか翻訳の約束を思いだし、自信が持てないながらも目にした緑の草木に力づけられ、仕事にのりだす「私」(ルース)の自画像が描かれる。続く第 5-104 連は仏詩の英訳本体であり、愛する人を亡くした語り手が知人から偶然に出くわした園遊会に招き入れられる導入部(第 5-13 連)、その片隅で漏れ聞く男女の求愛と願いかなわず髪を掻き乱しながら死を迎える男の顛末(第 14-102 連)、そして語り手が読者である恋人たちに語りかける結語(第 103-4 連)でなりたつ。最後に再びルースの語りが登場し、自らの作品に呼びかけて、読者の寛大な作品享受を願い、恋人たちの幸運を祈るエピローグ(第 105-8 の 4 連)で詩は閉じられる。

話を展開する二人の「私」がここにいる。物語の導入と終結を導く「私」は、読者に翻訳技量の未熟さをわび、過ちの訂正を願う、中世の作品に一般的な謙虚な語り手である。物語の本体を語る「私」は、かつて恋愛を実践し喜びを享受していたが、恋人の死とともに詩的想像力を埋葬し、笑うことを止め、今や悲しみを癒す術もない、哀れな姿をとっている。ともに二人の語り手は自らをさげすみ、内に持つ欠損感が話を進める動機となっている。しかし男女の求愛を立ち聞く語り手は、チョーサーの『鳥たちの議会』(The Parliament of Fowls)において求愛を目撃する、愛の経験も作法も知らない無知な語り手とは異なり、宮廷文化によく親しみ、宮廷風恋愛の経験者であったと思われる。礼儀に倣い、亡くした恋人を‘maistress’(女主人: 73)と形容するところに端的に表れている。それだけに、男が求愛に用いる愛の言葉に感動も驚きも表現されない。「これほど上品な嘆願を聞いたことがない」²と述べるチョーサーの語り手とは対極にある。また、恋わずらいならば歌やバラッドをつくり、愛の嘉納により癒されようが、恋人を亡くした語り手には黒衣で悲しみを飾るしかないという自己認識(II. 37-44)は、愛する女性に慈悲を乞い求める男

Symons の校訂本を用いた。またフランス語原詩は、The Poetical Works of Alain Chartier, ed. by James C. Laidlaw (Cambridge University Press, 1974)で読むことができる。なお本稿の議論に、拙稿「中世の女性 - イブとマリアの間で」『鉄村春生教授記念論集』(1987)の一部を書き改めて用いたところがある。

² ‘Of al myn lyf, syn that day I was born,/ So gentil ple, in loue or other thing,/ Ne herdé neuere no man me beforn,’ The Parlement of Foulys, ed. by Derek S. Brewer (Manchester University Press, 1972), II. 484-86.

たちとは悲しみの質と深さが異なることを教えている。こうした設定が、宮廷風恋愛の作法に従う男の言葉とそれを逸脱する女の応答とを、語り手が冷徹なまでに観察し、両者に偏りない、冷めた視点で聞きとることを可能にしている。

男の死は間接体験として人づてに聞く。そして一言の感想を添えることもなく語りを終える。自らの悲しみを晴らし、癒すかのようにさえ見える結末の語りである。

2 宮廷風恋愛と聖母崇拜

チョーサーの『バースの女房の話』(The Wife of Bath's Tale)において、女性がかつとも望むものは恋人や夫への支配権であるという正解を準備したのは、王妃グィネヴィアらアーサー王宮廷の貴婦人たちであった。彼女たちは、結婚が政略的におこなわれる社会にあって、夫に対し主導権をにぎることは制度のうえで不可能であった。しかし女性の魅力をもって若い騎士たちの憧れの的、騎士道愛の対象となり、自らすすんで隷属の身におく騎士を恋人にもつことは可能であった。³12世紀に発見されたという男女の新しい愛、「愛の封建化」ともよばれる宮廷風恋愛の態度がこれを現実のものとしていた。女性にたいする愛は、粗野な人、無学な人をも教化し、本能的な欲情を昇華する。また卑しい出身の男に高貴な人格をさづけ、高慢な者に謙虚の心を恵むと考えられた。⁴女性にむけられた恋の情熱が男を墮落させるどころか高貴にさせる、と理解に大きな変化が生じたのは、C.S.ルイスのいうように、革新的な出来事であった。

両者のあいだには直接の因果関係は認められないというものの、女性のうちに尊さをみとめ、「愛の宗教」に譬えられる、女性を崇めるこうした態度のなりたちに、聖母マリアの存在が力をかしたことは否定できない。そのマリア崇拜のありようにも、革新的ともいえる変化が中世後

³ C.S.ルイス『愛とアレゴリー』玉泉八洲男訳(筑摩書房、1972)第1章に詳しい解説がある。

⁴ アンドレアス・カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳(法政大学出版局、1990)第1の書、第4章「恋の功德」を参照。

期にあらわれた。



今、鳥たちが歌い喜びあrawす
草は茂り、枝に葉がつく
私は歌う汚れなき人のことを
王のなかの王こそ彼女を母に選ばれた
彼女は罪なく汚れもなく
神慮によりて王の血をひく方
人の王が彼女から生まれた
うち捨てられた我らの罪をあがなうために
ガブリエルが彼女を迎えて言う
「ようこそ、恵みのマリア 我らの主は汝に宿らん
子宮の果実に祝福あらん
汝は子とともに行くがよい、私は汝のお供をしよう」
天使は受胎の知らせを伝えるも
マリアはその言葉をいぶかしく思い
天使に訊いて言う、「これは何事か
私は人とは関係を持ってはおりません」
彼女は子をはらんだ乙女、彼女をおいて
子を宿したといえる乙女はなし
彼女を除けば乙女にして母であるものはいなかった
彼女が神の子を生むのは道理なり

(Cambridge, Trinity College MS 323、13世紀)



私は歌う汚れなき乙女のことを
彼女が王のなかの王を息子に選んだ
彼は母のいる場所に、草にかかる
四月の露の如く静かにやってきた
彼は母の寝屋に、花に落ちる

四月の露の如く静かにやってきた

彼は母が寝そべる所に、小枝にかかる

四月の露の如く静かにやってきた

母にして乙女は彼女をおいていなかった

かの乙女こそ神の母なり (下線部筆者。以下同じ)

(British Library, Sloane MS 2539、15世紀)

ここにならべた2つの短詩⁵は、ともに受胎告知をテーマとするマリア賛美の歌である。先に掲げた詩は13世紀に、後の詩は15世紀にそれぞれ読み詠われたといわれている。マリアは、エペソの宗教会議(431年)において正式に神の母として認められた。マリアへの敬愛はその後さらに深まり、12世紀にはキリストとならぶ位置にまで高められる。それは「マリアの勝利」とよびならわされ、キリストを膝に抱く聖母子座像として具象化されている。その座像はさらに聖母子立像へと変化し、いま

⁵ 2つの詩は、*Religious Lyrics of the Thirteenth Century*, ed. by Carleton Brown (Oxford University Press, 1923), p. 55 と *Religious Lyrics of the Fifteenth Century*, ed. by Carleton Brown (Oxford University Press, 1939), p. 119 からそれぞれ引用した。

(Cambridge, Trinity College MS 323)

‘Nu this fulles singet hand maket hure blisse/ And that gres up thringet and leved the ris,/ Of one ic wille singen that is makeles;/ The kin of halle kinges to moder he hire ches.// Heo his wituten sunne and wituten hore,/ I cumen of kinges cunne of gesses more./ The loverd of monkinne of hire was yboren/ To bringen us hut of sunne, elles wue warren forloren.// Gabriel hire grette and saide hire ‘Ave!/ Marie ful of grace, ure loverd be uit thee;/ The frut of thire wombe, ibleset mot id be./ Thus sal go wit chide, for sout ic suget thee’.// And thare gretinke that angle havede ibroun/ He gon to bithenchen and meinde hire thout./ He said to then angle, ‘Hu may tiden this?/ Of monnes ymone nout y nout iuis’.// Mayden heo was uid childe & maiden her biforen,/ & maiden ar sothent hire chid was iboren./ Maiden and modern as never wimon boten he:/ Wel mitte he berigge of Godes sune be.// I blessed beo that suere chid & the moder ec./ & the suete broste that hire sone sec:/ I hered ibe the time that such chid uas iboren,/ That lesed al of pine that arre was forloren.’

(British Library, Sloane MS 2539)

‘I syng of a mayden that is makeles/ Kyng of alle kynges to here sone che ches.// He cam also style ther his moder was,/ As dew in Aprylle, that fallyt on the gras.// He cam also style to his moderes bowr/ As dew in Aprille, that fallyt on the flour.// He cam also style ther his moder lay/ As dew in Aprille, that fallyt on the spray.// Moder & mayden was never non but che/ Wel may swych a lady Godes moder be.’

やキリストの母としての脇役ではなく、マリア自身が戴冠して、人びとの崇拜を直接受けとめる主体となるのである。⁶この2つの詩は、母と子の関係のなかに生じた、マリア像の「勝利」から「戴冠」にいたる変容の軌跡をテキストの上にとどめている。キリストに主体をおいた「王のなかの王こそ彼女を母に選ばれた」(‘The kin of halle kinges to moder he hire ches’)の表現が、ほぼ2世紀の時空をへて主客に転倒をひきおこし、「彼女が王のなかの王を息子に選んだ」(‘Kyng of alle kynges to here sone che ches’)と捉えかえされる。脇役であった女性を主役におしあげた、15世紀のマリア賛美の背景に、神性にもつながる女性の尊さを自覚し、それをマリアに託して称揚する、社会の強いめざめが読みとれる。パースの女房がくりひろげた異端表現とは違いこそすれ、それは中世に生きる女性の穏やかな主張であり、革新性をもちながらもなお許容される類のものであったろう。

宮廷風恋愛にもとづく女性崇拜を神の信仰にも比肩しうると考える精神態度は、聖母崇拜と接続し、聖俗渾然一体となって当時の女性劣等観を修正するのに、少なからぬ影響をあたえたことは否定できない。⁷

3 伝統的な権威の言葉

愛をめぐる男女のやりとりや男の言葉を観察すれば、前章にふれた女性にたいする愛情が、男の感情の教育装置⁸としてよく機能していることをこの作品は示している。

語り手が招き入れられた園遊会では、宮廷に参内したばかりの若者たちが、意中の女性のために甲斐がいしくたち働き、奉仕の是非の判断をください「裁判官」(‘juges’: 106)のように女性を見立て、眺めている。一方、女性たちはひとかけらの感情も表に見せることなく、若者を思いの

⁶ 聖母子像の変遷に関する記述は、石井美樹子『聖母マリアの謎』(白水社、1988)に依拠した。

⁷ Eileen Power, *Medieval Women* (Cambridge University Press, 1975), p. 26 を参照。

⁸ 女性を人間の「教育装置」として論じる点については、ジョルジュ・デュビュイ、ミシェル・ペロー編著『女の歴史 II - 中世 1』杉村和子・志賀亮一監訳(藤原書店、1994)第8章「宮廷風恋愛のモデル」(特に、p. 427)を参照。

ままたに手中におさめる。そのなかに、理を越すほどに女性を想い(‘his desire fer passed his reason’: 114)、青白く、やせ細り、身元を明かす紋章もない、黒衣に身をくるむ一人の若者(‘Alle blake he ware and noo devise, but playne’: 130)が目にとまる。彼は権威ある「学校教師」(‘his scolemaister’: 137)を前にして顔をうつむけ、一言も話せず、女性の美しさに哀れな表情で見惚れるばかりである(‘upon hire beauté/ He loked stille with a right pitous face’: 139-40)。女性は若くはつらつで、それでいて奥ゆかしい(‘Right yonge and fresshe, a woman ful covert’: 177)。彼女は本来病を癒す「医者」であろうが、今はその医者に近づくほどに彼の苦悩は深まるばかりである(‘His leche was nere, the greter was his thought’: 201)。

愛のやりとりは、男が女を攻略する戦になぞらえ、軍事の用語を使って描かれる。女性は「善の砦」(‘A garrison ... of al goodnesse’: 175)を築き、「抵抗(尊大)の軍旗」(‘the standart of Daungere’: 180)のもとに自信と落ち着きを装い、恋人の心に備えて(あるいは挑発するためか)「(前線の)要塞」(‘a frounter for a lovers hert’: 176)を設ける。男はついに意を決し、怖気づいた涙声で、そしてなかば気がふれたように告白する。沈黙を破る男の想いの深さは、以後の男女の言葉が各1連に収まるのとは対照的に、唯一形式の均整を破り3連にまたがる言葉の表出(219-44)のなかに、うかがい知ることができる。

宮廷風恋愛に伝統的な言葉づかいを、男の求愛のなかに観察してみよう。愛は奉仕することであり、無私的愛である。男は冒頭の告白にそう述べる。

私が貴方のご慈悲を受けるに値せず / 絶えず不安のうちに暮らそうとも
/ 貴方の気高いお心に障ることなく / 貴方を愛し、貴方に奉仕すること
をお許してください。 / (中略) / 報いを求めぬ、貴方だけが所有する
人となるように / 愛は私を結びつけたのです。⁹ (237-44)

⁹ ‘Though it be so that I cannot diserve/ To half youre grace, but alwey lyve in drede,/ Yet suffer me you for to love and serve/ Without magré of youre moost

男はまた、愛は運命の偶然だけの仕業ではなく、女性の美しさがそうなさしめたと主張する。男の言い分には、美に射抜かれ、恋に悩む男に対し憐れをかけるのが女性の義務である、との男の論理が含意される。

そして運命だけがその偶然により / 私にこの苦しみを受けさせたのではなく / 貴方の美しさによりこのようになった以上 / なぜ貴方は私を軽蔑することをお選びになるのですか。¹⁰ (273-76)

男は当然の応報を頼りに、苦しみを知る者にこそ愛の甘美な喜びが訪れるという宮廷風恋愛の掟¹¹を展開し、女性の慈悲を信じて苦痛に耐えることを約束する。

冷たさを知らないものは熱さを楽しめない / 一方は明らかに他方を求める。 / そして悩みと悲しみなしに手に入れないかぎり / その幸せの本当の意味を誰も知りえない。¹² (353-56)

運命の望むとおり、良かれ悪しかれ / 貴方の慈悲を信じてこの苦しみに耐えるつもりです。¹³ (481-82)

さらに、苦痛に耐えきれずに自らを偽るよりも、死を選ぶ方が本望だ、とも述べ、死にも勝る想いを伝える。

goodlyhede;/ [...] / Love hath me bounde withoute wage or mede/ To be youre man and leve al other thing.'

¹⁰ 'And sith Fortune nat oon by his chaunce/ Hath caused me to suffre al this payne,/ But youre beauté, with al the circumstaunce,/ Why list you have me in so gret disdayne?'

¹¹ 『宮廷風恋愛の技術』の掟、第14条「容易に成就したる恋はその価軽く、至難なる成就によりてこそ恋はその価尊し。」

¹² 'Who hath noo colde, of hete hath noo deynté/ The tone for tother axed is expresse;/ And of plesaunce knoweth noon the certaynté,/ But it be wonne with thought and hevynesse.'

¹³ 'Fortune will thus: that I, for well or woo,/ My lif endure, youre mercy abiding;'

しかし貴方の冷たい判断により / 私がこれほどの苦痛のうちに死んだとしても / 恋人であることを偽り、生きるよりは / 私には苦しみがはるかに小さくなるはずです。¹⁴ (545-48)

また恋の掟¹⁵に倣い、内密の愛についても男は触れる。

私は確かに沈黙を大事にします。 / 秘密に保つことができない人は / 決して人を愛すべきではありません。 / 自慢げに語る人は敬愛されもしませんし / そのとき口は大きな災いとなるのです。¹⁶ (736-40)

このような男の言葉とレトリックの約束事は、伝統的な宮廷風恋愛文化のなかで育まれ、洗練されたものである。求愛に駆使される言葉は、「愛の封建化」や「愛の宗教化」と呼びならわされるとおり、封建領主制度、軍事、宗教の世界で用いられる言葉に重なる。そして男の論理の展開の末に予定調和的に待つものは、慈悲ある女性マリア(‘Ma Dame avec Mercy’)に倣い、跪き、情けを求める恋人に女性が憐れみをかけ、その愛を受け入れる姿であろう。しかし、その調和が崩れるとき、言葉の力と機能が失効する。

4 抵抗する女の言葉

チョーサーの雌鷲は、雄鷲の求愛の言葉を聞きおえると、「新しく咲いたばかりの赤い薔薇が、夏の陽を浴び色づくように、恥ずかしさでまっ赤になった」¹⁷と身体描写で描かれる。対照的に、『慈悲なき美女』

¹⁴ ‘But when that I, by youre ful herd sufferraunce,/ Shal dye so trewly and with so gret payne,/ Yet shal it do me mucche the lesse grevaunce/ Then for to lyve a fals lover, certayne.’

¹⁵ 『宮廷風恋愛の技術』の掟、第13条「世間にその秘密洩るれば、恋は存続する事希なり。」

¹⁶ ‘For certainly I love better silence./ Oon shulde not love by his hertis credence/ But he were sure to kepe it secretly,/ For avauter is of noo reverence/ When that his tonge is his moost enemy.’

¹⁷ ‘Ryght as the frosché redé newe/ Azen the somyr sunné coloured is,/ Ryght so for shame al waxen gan the hewe/ Of this formel, whan she herde al this.’ The Parlement of Foulys, ll. 442-45.

の女性は、冒頭の告白に「顔色も変えず、気も動じることなく」(‘Without chancing of coloure or courage’: 247)応答し、「あなたの想いはたいそう愚かな行為です」(‘Sire, youre thought is gret folly’: 249)と言葉をもってにべもなく拒否をする。男は女に直接呼びかけ、一人称語りで哀れな立場に同情を引くべく、嘆願をくり返すが、女は個人としての対応を巧みに避け、非人称表現と諺のような言い回し¹⁸を用いて応答する。二人に対照的な語りの特徴は、男には個人的な主観の声を、女には真理を帯びた同性代表としての声を、それぞれ付与する効果を生んでいる。

たとえば、女の眼とそよく視線に触れただけで忠誠と信頼を寄せざるを得なくなる、という男の甘美な言葉に対し、本来眼が持つ機能を喚起して、「私たちの眼は物を見るために作られているのです。なぜ眼の使用を惜しまなければいけないのでしょうか？」(Oure eyen are made to loke—why shulde we spare?: 266)と男の個人的情感をモノの世界に引き戻す。

男の恋わずらいさえも疑う言葉はまた辛らつである。「この病は実に耐えるのは容易です　それが原因で亡くなる人はほとんどいないのですから」(‘This sikenes is right easé to endure--/ But fewe people it causith for to dye—’: 293-94)。また、かりに愛が人を悲しませるとしても、「二人より一人で悲しむほうが被害は少ない」(‘Lesse harme it were oon sorrowful then twayne’: 300)と格言のような表現を用いて男をつき放し、憐れみを覚え、恋人となって共に悲しむことを否定する。この苦しみに耐えるのは男にとって時間の無駄となり、自らの名誉を大事に考えるように諭すこととなる(‘To youre worship se wele, for that is nede,/ That ye spende not youre season al in vayne’: 485-86)。ついには、「私の助言に従う気持ちがあるのなら、代わりにもっと美しい、評判の高い人を探す」ように、現

¹⁸ 女性の言説に観察される諺表現の多様さと具体的箇所については、Symons (2004)の‘Explanatory Notes to La Belle Dame sans Mercy’(pp. 242-59)を参照。また、Proverbs, Sentences, and Proverbial Phrases from English Writings Mainly before 1500, compiled by Barlett J. Whiting (Harvard University Press, 1968)には、本作品の女性が用いる言葉から多くの用例(あるいはそれに類する用例)が取りあげられている。

実的な対処を勧めている(‘If that ye list to doo after my counsaile,/ Sechith fairer and of more higher fame’: 517-18)。

女はまた男からの自由を主張する。宮廷風恋愛は女性を人格陶冶の手段に見立て、女性は男に征服されるべき心の持ち主として位置づけられる。『慈悲なき美人』の女は、感情教育の中心に祭り上げられた女性のポジションを自ら降りて、男の論理の身勝手を突いてゆく。女は珍しく一人称の主語を立て、自分の姿勢を明らかにする。

無理やり自分の心を押しつけない人は勝手にすればよいのです。 / 今私は自由であり、自由な意志を持ち続けます。 / この世の幸せのために男の支配に統治されることは / 決してない、と私は誓って申しませう。¹⁹

(313-16)

この「自由意志」を行使する背景に、言葉に隠れる偽善性を疑う態度がある。それを見抜く「知恵」が女性に備わっているとも主張する。「単純ではない」(‘not so semple’: 325)女性には、男の言葉は実体のない見せかけに見える。男は「女に夢を見させるために」(‘To make hem [i.e.ladies] al gret wondres to supoose’: 330)言葉を「学校で学」(‘holde scoles’: 329)び、「卑しい心」(‘A currysse hert’: 389)を「虚飾」(‘Fals Semblant’: 393)で飾るのである。

言葉による求愛の言語行為そのものにも不信を突きつける。奉仕や忠誠の約束行為は、その内容文を発話することそれだけで、遂行することができる。

このような誓いをしっかり立て / またあちこちでそれを裏切る約束をする。 / そのような貴方たちは、言葉(の音)が消えると間もなく / その誓いが力を失くすのをよくご承知のことでしょう。²⁰ (373-77)

¹⁹ ‘Chese whoso woll there hertis to avaunce—/ Free am I nowe, and fre will I endure;/ To be rewled by manis goveraunce/ For erthely good, nay—that I you ensure!’

²⁰ ‘Ye and other that swere suche othes fast/ And so condempne and cursen too and

遂行文を字句どおりに理解し、互いに信義をおく共通理解の上に宮廷風恋愛の文化がなりたつが、女は男の言語を疑い、この基盤を揺さぶる。上品な言葉の裏に潜められた性愛を嗅ぎとるのも女の「鋭い観察眼」である。男が愛していると言うだけで、なぜ男の望みどおりにしなければならぬのか、と問う女はさらに続けて言う。

もし私がそのような者と関係を持つことがあるとして / その後、取り返し
のつかないことと後悔し / 悲しみのうちに暮らすことになるならば /
それは「恥ずべき哀れ事」と呼ばれることでしょう。²¹ (713-5)

下線を施した語句(‘medelyd with’)に対し、Symons はテキスト注釈欄に「性的関係を持つ」の語義をあたえ、男の狙いが肉体的な快楽にあることを意識する女の読みを可能性として示している。

男は秘密の順守を約束したが、女は昨今のスキャンダルを好む社会に言及しながら、偽りの恋人はカササギのように喋りまわり、思慮深い人ですら人の過ちを噂するのを望んでいる²²ときり返す。男が「学校」で学んだ規範的な言葉はすべからず疑問に付され、その力と機能を失うこととなった。²³

5 コンテキストと作品受容

『慈悲なき美女』のテキストは、7つの写本と4つの初期印刷本²⁴によ

fro,/ Full sycourly ye wene youre othes last/ Noo lenger than the wordis ben agoo.’

²¹ ‘If I medelyd with suche or other moo,/ It might be called “pit manerlesse,”/ And afterwarde, if I shuld lyve in woo,/ Then to repent, it were to late, I gesse.’

²² ‘The moost secret wil well that sum man say/ Howe he mystersted is on summe partyse;’ (ll. 745-46)

²³ フランス詩における、宮廷言語と疑問を呈す女性については、Gretchn V. Angelo, “A Most Uncourtly Lady: The Testimony of the Belle dame sans mercy,” *Exemplaria* 15.1 (2003)を参照。

²⁴ 現存写本：Oxford Bodleian MS Fairfax 16; London British Library MS Harley 372; Longleat House MS 258; Cambridge University Library MS Ff 1.6 (Findern MS); Cambridge Trinity College MS R 3.19; London British Library MS Additional 17492.

り現在に伝わる。このうち4つの写本には、折にふれ言及したチョーサーの『鳥たちの議会』がいっしょに収められており、両作品を男女の愛という共通のテーマのもとに読み比べるコンテクストが写本編纂者により準備されていたと言える。

刊本時代に入ると、『慈悲なき美女』は印刷家リチャード・ピンソンにより、初めてチョーサー作品として特定され、ピンソン版チョーサー作品集3部作の掉尾を飾る、1526年の『名声の館』(The Boke of fame)に収録されることになる。ここに選ばれ纏められた作品の内容から、女性の顧客をとくに意識した編集ぶりが想定される。標題の『名声の館』のほか、チョーサーの『鳥たちの議会』と『真実』、チョーサー翻訳と明記された『慈悲なき美女』、女性擁護の先がけと評されるフランスの女性詩人クリスティン・ドゥ・ピサンの『金言集』、作者不詳の『メアリー・モードリンの嘆き』と『ディドーからアエネアスへの手紙』、そして『リドゲイトの諺』が収められている。ピンソンは『慈悲なき美女』の編集に際し、シャルティエ自身の結語(第103-104連)と翻訳者ルースのエピローグ(第105-108連)を削除して、代わりに6連42行からなる独自の解釈をまじえた「印刷家の後書」(Lenuoy de limprimeur)を書きくわえた。²⁵ここでは、男女の結婚愛にたいする処世訓として作品を読み、受容する態度が読者に向けて提案されている。男性には「欲望を思慮によりおさえる」こと²⁶、女性には「肉欲を果たさんがため」の男の「美辞麗句」から「女性に備わった思慮分別」で身をまもること²⁷を、それぞれ助言したあと、熱烈な愛は結婚後にまで控え、それまでは神を一番

初期印刷本：Richard Pynson, ed. and print. *The Boke of fame* (London, 1526) [STC 5088]; William Tynne, ed. *The Workes of Geffray Chaucer Newly Printed* (London, 1532) [STC 5068]; John Stow, ed. *The Workes of Geffrey Chaucer* (London, 1561) [STC 5075]; Thomas Speght, ed. *The Workes of our Antient and Lerned English Poet, Geffrey Chavcer* (London, 1598) [STC 5077].

²⁵ ピンソン版テキストには、ハーバード大学、ハーバード・コレッジ図書館蔵コピーのマイクロフィルム(STC 5088)を用いた。

²⁶ ‘But moderate your desires by discrecion’ (l. 816; sig. e3^v, left column)

²⁷ ‘And ye ladyes/ endued with hye prudence/ Whan these disceitful louers labour styll/ With their fayned and paynted eloquence/ Their carnall lustes to cause you to fulfill/ Many a huge othe depose they wyll/ Yet for all that take hede aboute all thing/ It is no loue they shewe but blandisshyng’ (ll. 821-28; sig. e3^v, left column)

に愛するよう助言している。²⁸

12世紀に生まれた宮廷風恋愛は結婚外の愛を問題にし、結婚愛は義務と必要の要素が関係することから、人格陶冶と感情教育の場とはなりえないとされた。しかし、女性を聖母のごとく崇敬し、下僕となって慈悲を乞う精神態度は、今やピンソン版により、『鳥たちの議会』で示されるような、結婚につながる男女の愛という文脈に大きく転移される。その結果、貴婦人のみが独占していた女性の尊さが、すべての女性に分かちもたれる道が開かれることとなった。さらにピンソン版の『慈悲なき美女』は、印刷家の後書により、結婚という果実にいたる愛の要諦がなかば強制的に問題となり、男性の度を超さない節度ある情熱、男の言葉の真偽を見ぬく女性の思慮、そして結婚後にはじめて許される熱烈な愛が、16世紀の時代的な読みとして、作品の解釈の上にかぶせられることになった。

6 まとめ

宮廷風恋愛は神にもつらなる尊さと高貴さを女性のなかに見出し、女性を精神世界の中心に据えることになった。ここには聖母マリアに仮託して女性の劣等意識を改める強い力が働いていたであろう。それはまた女性の心を征服することにより、人格の陶冶が行われると考える男の論理が働いたことも否定できない。シャルティエやチョーサーが活躍した14世紀後半は、頑迷な女性劣等観のなか、宮廷風恋愛はすでに衰退の途にあり、その文化で用いられた固有の言葉と所作が庶民の下種な物語に転用され、女性をからかうファブリオーという話のジャンルもできていた。こうした社会文化的な状況のなかで、宮廷風恋愛の愚かさを暴く女の言葉が女性読者の心を捉えたことは想像に難くない。論争の焦点は、女性の前で跪き、受動的で従順な女性を最終的に手に入れる、男の言葉が無効化し、男のレトリックが女性の言葉の前で膝を折る姿である。

²⁸ ‘... I counsayle you be nat to bolde/ Excepte it be ordred to suche degre/ As concerneth spousayle in honeste/ Yet if ye wyll in feruent loue excel/ Loue god aboute althyng & than do ye well.’ (ll. 850-56: sig. e3^v, right column)

この作品を、男の性愛に引き込まれることに不安と恐怖を覚える、男嫌いの女性像を描いたものとする解釈もある。²⁹しかし初期印刷本に見る読みとりは、男のロジックに疑問を付し、男の視線で作りこまれる女性像を拒絶し³⁰、洞察力、知恵、能弁そして自由意志を行使する女性の登場に、女性読者が共感を示したことを暗示している。

²⁹ Symons (2004), “Introduction”参照。

³⁰ Symons (2004), p. 205.